

広場舞の二つの側面

―都市空間における権力と公共参加―

潘妮妮

●はじめに

「広場舞 (guang chang wu)」とは、市庁舎広場、公園、大学のキャンパス、団地内の緑地など全ての公共空間において、健康増進のためのダンスを主に行う自発的な集団活動のことである。二〇一三年後半から二〇一四年前半にかけて、メディアは広場舞で流される音楽の音量によって引き起こされたご近所トラブルを連日取り上げてきた。汚物をかけたり、威嚇発砲をしたり、音を発したり等の対抗手段によって広場舞の参加者を広場から追い出すような事案も相次いでいる。二〇一四年四月に浙江省温州のある管理組合は音響装置を二六万円で設置し、広場で踊っている人々に対し「反撃」に出た。この事件に注目した浙江省の幹部は、末端部門の「不作為」を重く批判したうえで、末端部門に対し

対応措置をとるよう指示した。

事実、中国の都市化の急速な展開に従い、広場舞のように、自分の利益ばかりを主張し、近隣住民との妥協をしないことで団地内トラブルが引き起こされるようなことは決して珍しいことではなくなってきた。ペットや車の駐車位置など、すべてのものが衝突の火種となり得る。このようなトラブルは「個人」の素質が劣悪であることが原因であり、各個人またはコミュニティ内での仲裁により解決すべきであるというのが一般的な認識である。しかし広場舞に関するトラブルに対しては、世論は常にその背後にある政治社会的な意味を「深読み」し、国家が関わるものであるとみようとす

る。それらの世論には様々な形のものがある。第一に、温和な批判者は広場舞を「文化的弱者」の唯一の娯楽であるとみなし、同情を与えている。第二に、過激な批判者は広場舞を「公害」であるとみなし、中国にかつて存在していた「単位」組織の残滓^{ざんし}であると結論付けている。第三に、更に政治的な見方として、広場舞は文化大革命期の「忠の字舞」を受け継いだものであり、当時の「個人の意思は他人のそれより上にある」という政治的な専制意識を反映したものであるという見方もある。このように様々な見方があるが、それらはすべて広場舞を外部から観察した結果出てきたものである。観察した結果出てきたものであり、広場舞の参加者が自身をどう認識しているのかという点が欠けている。



後進的要素のイメージである。もうひとつは広場舞の活動の繁栄・普及である。本稿はこの二つの面が形成された背景に関して簡単な分析を行う。これらの矛盾は、現代中国の都市ガバナンスをめぐる様々な力、すなわち協力関係にある行政・資本権力、「中産階級・市民」の文化権力、「大衆」が伝統社会のなかで得た行動資源などが相互に影響した結果である。



●行政と資本の協力—都市における「広場」の役割—

政治と社会のあり方の変遷に関して人類が持つイメージにおいて、「広場」は公共権力を体現する重要な場所である。近代中国は都市建設において西洋の広場の構造を取り入れ、それを意識的に伝統的な政治社会秩序との決別の象徴とし、民族国家を構築するという隠喩を含ませた。中国共産党によるガバナンスは広場を政治的に最大限活用し、ソ連のように広場を「人民至上」の象徴的な場所と

しただけではなく、広場の建設と都市環境の管理を繋ぎあわせ、大衆の大規模な動員により(例えば、一九五〇年代の重慶や武漢などで行われた愛国衛生運動では、ゴミ捨て場が大衆動員によって広場に換えられた)、社会主義国家のイデオロギーを社会のなかに埋め込もうとした。

一九八〇年代に入ると、建国初期の様々な政治的概念が依然として残されていくなかで、党・国の上層部は政治的合法性にヒビが入ることを防ぐため、都市のど真ん中に位置する広場の名称に「人民」を入れ、そこを「大衆活動の空間」とした。しかしよく知られているとおり、その頃の政治的合法性の実質的な重心は既に経済発展に移り、GDPにおける競争こそが地方官僚の成績につながる中心任務となった。それにともない、地方政府は「生産第一、分配第二」の「生産型政府」へと移り変わり、行政と資本の協力が理にかなったかたちで新たな都市計画を主導した。一九九〇年代半ば、大連の広場を中心とした都市の再開発が全国的な都市広場の建設の高まりをリードし、現代の広場の基本的な形式を定めた。一方で、現代の広

場は古い街に対する「全面的再開発」の産物であり、再開発の目的は更に多くの外来商業投資を呼び込むことであった。その設計においても「先進的」な美的意識に近付こうとしており、同時に旅行客を呼び込む効果も持たせていた。言い替えれば、再開発は都市の外にあるものを念頭に置いておこなわれたのである。もう一方で、新たに建設された広場はもはや公共建築の中心ではなくなった。新たに建築された公共建築(政府機関、商業センター、文化センター、運動場、および商業住宅区の付属物)は行政と資本権力の主導下で受動的な大衆に与えられた空間である。実際は、このような空間の配置は、「大衆」という概念が建国期にイメージされたような権利主体としての性質を持たず、単なる「被統治者」としての性格しか持たないことを暗示している。

商業住宅は商品化されたプライベートな領域であり、その排他的権力はいうまでもない。政府機関は行政の権威の象徴であり、人が勝手に侵入できるような空間ではない。新たに建設されたその他の公共建築は消費主義的倫理の排他性を帯びている。商業センターの

消費基準と、新たに建設された文化センター、運動場における中産階級「美的感覚が、そこに無形の敷居と圧力を構成しているのである。例えば重慶のメディアが、労働者が夏にデパートの入り口で空調にあたって涼むことを許すべきか否かという問題をかっけて提起したことがある。これはまさに伝統的な大衆倫理と主導権を握る資本および消費倫理が互いに衝突していることの反映であるといえる。

建国初期の広場という空間が作り出した権利主体のイメージが「大衆」であるとすれば、今日の商業住宅、政府機関、商業センターと文化センター、運動場によって作り出された権利主体のイメージは「中産階級・市民」であるといえる。中産階級・市民の空間の外に大衆の広場があり、広場で繰り広げられる主な娯楽活動は商品化されていないもので、消費主義に基づいた中産階級の消費観とは相互に対立している。そのため広場は、個人主義、独立、そして自治を代表する中産階級・市民と、集団主義と権威に対する服従を代表する大衆という二つの階級の隔離を象徴している。

●中産階級・市民の文化的権力―「おばちゃん」イメー ジの示すもの―

中国の急速な都市化は海外における経験を学ぶことの上に成り立っており、広場とその周辺の建築との相対的な位置と地位は中産階級・市民に属する都市型の権利を生み出している。中国の市場化されたメディアは急速な都市化と共に成長してきたものであり、中産階級・市民の価値を押し出すことを自分たちの務めとしている。そのため、我々は大衆メディア



アに描き出された広場で踊っている人々のイメージを観察することで、ある程度直観的に中産階級・市民のアイデンティティをも観察することができる。このようなアイデンティティは広場で自由に踊っている「非市民」の描写を通して更に際立ってくるであろう。

広場舞で踊っている人々は大衆メディアのなかではよく「おばちゃん（中国語では「大妈／*Da ma*）」と呼ばれている。その概念としては四〇歳以上の中年女性であるというだけなのだが、一九八〇年以降中国の急速な制度変化、そして彼女たちが一九七〇年代上半期以前に生まれた点を鑑みると、「おばちゃん」という表現は、実質的には成長経歴と密接に関連し、現代社会とは相容れない集団的性格を持つていることを暗示している。

具体的にいえば、まず、「おばちゃん」は物質的に恵まれているとはいえない年代に育ったため、日常的に消費に対する強烈な欲望を持たないか、「理性」的な消費習慣を持たないと一般的にはみられている。次に、毛沢東時代の中国女性とは同様の「労働者」としてみられていたため、中産階

級の淑女らしさを持たず、「おばちゃん」は教育程度が低く立ち居振る舞いも上品ではないことを暗示している。最後に、「おばちゃん」は集団主義社会のなかでの経験を通し、集団主義的な大衆動員に服従することを覚えたため、個人主義的な開放社会の公共参加の方式には適応しないと一般的にはみられている。

数年前、『暇人馬おばちゃん（中国語では「闲人马大姐／*xian ren ma da jie*）」というドラマが人気を博した。物語そのものは街中のトラブルを解決することに心血を注ぐコミュニティ幹部の「おばちゃん」を正面から描いたものであるが、そのドラマは同時に、「おばちゃん」がポジティブな効果をもたらし得る空間を厳密に限定したものである。その空間とは下級階層の労働者が集まる古いコミュニティであり、閉鎖的な顔なじみ同士の社会である。そして「おばちゃん」が街中のトラブルを解決してコミュニティをうまく回すことはプライベートな空間の侵害を常にもともなうものである。

二〇一三年の英『エコノミスト』誌で発表された「Dancing queens: Grooving granies encounter

opposition」という文章のなかでは「おばちゃん」の中国語の発音「*dama*」を直接用いている。この文章は中国の国内世論における「おばちゃん」批判の高まりを取り上げた。この文章の作者は好奇心に満ちた目で、これらの「モダン」な「愛の歌と西洋のダンススタイルを好む」ような「高齢の女性」を観察している。文章の取材対象は広場の周囲で観察している「市民」であり、「おばちゃん」

本人たちには声を上げる余地は与えられていない。そして「広場舞で流される音楽」を描写する際に、作者は「鳳凰伝奇」という二人組のユニットを取り上げ、このユニットが「中国人民解放軍第二砲兵部隊（戦略ミサイル部隊）の文芸組織に所属している」ことを特に強調した。歌手と軍の文芸団との関係を強調することは、中国の大衆音楽の流行の状況に詳しくない『エコノミスト』の読者に、広場舞の音楽と政治的宣伝との間には関連性があると誤解させてしまう。このユニットは売れ始めてから確かに軍の文芸団に入っている。しかし歌っているのは極めてストレートな恋の歌でしかない。『エコノミスト』のこの文章が中

国語に翻訳された際の題名は《広場舞のおばちゃんを救う》であった。「救う」という表現により、「先進」が「後進」を支配するといったような一種の権力主張を強烈に表している。

●大衆参加の資源―「おばちゃん」と「動員型ガバナンス」の結合―

都市空間の権力構造からみても、主流な世論からみても、広場の大衆、つまり「おばちゃん」は、中国の都市発展のうねりのなかで絶対的な弱者の位置に置かれている。広場舞のように「近所迷惑」な行為に対抗する「市民」の行動こそが強烈な社会的合法性と社会資本を持っている。しかし、本稿の始めに挙げたようないくつかのニュースを振り返ると、ひとつの矛盾が浮かび上がってくる。それは、広場舞の集団性、日常性、そして公開性に対し、直接的な対抗を合法的に行うことは難しいということである。その対抗行為は基本的に個人の行動であり、利害関係を持つ人々が組織的に対抗するものではない。このような矛盾を解決するためには、しばらく観察者の立場を離れ、広場舞の空間

に入り、「おばちゃん」とコミュニティ、そして国家との相互作用を体感することが必要である。中国の全体のガバナンス政策のなかにある「逆向運動」の影響と、「おばちゃん」が自身の持つ社会参加資源から得る利益により、「おばちゃん」が広場に自身の公共的空間を築くことができるのである。

広場舞の合法性は、「おばちゃん」と国家ガバナンス体系との長期的な相互作用のなかで形成されたものである。つまり、「おばちゃん」が国家の「動員」に積極的なリアクションを行った結果なのである。周知のとおり、中国の党政系統はそのガバナンスにおいて、前文で挙げた都市建設のように工業化と近代化に順応する「正向運動」の他に、都市や農村の弱者グループを視野に入れた逆向運動も同様に行ってきた。そして中国の逆運動には、先進民主主義諸国の福祉政策を模倣するとともに、体制そのものの伝統的資源、特に政治権力を支えるために社会に埋め込まれた「大衆動員」資源を利用して、という特徴がある。八〇年代以降の大衆動員は政治的色彩が薄く、単なるガバナンス

の道具であった。政府主導の下での民衆参加により政府の行政コストを削減することがその重要な目的であった。

「大衆動員型のガバナンス政策」が広場舞の合法的な地位を築き上げてきたことには二つの意義がある。ひとつは、一九九五年に國務院の発布した《全国人民健康計画綱要（以下、「綱要」）》である。もうひとつは、二〇〇五年に始まった全国文明都市建設活動である。「綱要」で述べられているのは、「経済・社会・体育の発展レベルが異なる全ての地域」の人民の「大衆体育」を進展させることである。この目標のために、「綱要」は非商品化された基層大衆の健康づくりの方法を奨励し、国家の社会全体に対する管理の枠組み（政府、企業・団体や地区の末端組織）が大衆動員の責任を負う必要点に

関しても明確に規定している。「綱要」が定めた健康意識と動員思想は二〇〇五年に始まった全国文明都市建設活動において更に具体的な実践に移された。都市の「文明的な生活」のイメージを打ち立てるため、健康と娯楽の二つの面を持つ広場舞が重要な大衆動員の方式となった。広場舞活動はコスト

が低く、組織しやすく、敷居も低く、強烈な視覚効果ももたらす。ゆえに地方政府が好んで用いる動員方式となったと同時に地方政府の仕事の成果を明らかに示す手段ともなった。「近代化」の影響を受けた若い「市民」が消費主義的な休暇の過ごし方をより好むようになり、政府の動員する活動には参加しづらくなった。しかし、「おばちゃん」は「大衆」を対象とした国家的動員行動に負担することを通して公共参加の空間を確立したのである。



「おばちゃん」は国家ガバナンスと結合し、公共空間のなかで組織的に活動を行う。これは広場舞に對抗するための個人行動とは真逆の性質を持つ。そして「おばちゃん」が相互コミュニティションを通じて組織する資源もまさしく「彼女たち」の成長背景からもたらされたものである。

筆者は広場舞現場への訪問を通して、広場舞空間の形成と発展には以下の要素が関係していることが分かった。まず、ひとつの広場舞グループの中心はほとんどが（定



年退職した）「単位」の中年女性である。「単位」は定年退職後の割り当て住宅制度を廃止している。しかし、退職後も交友関係を維持し、孤立を防ぐため、同僚が何人かで約束して商業住宅区（または隣り合ったいくつかの商業住宅区）内に一緒に住むという状況が一般的である。次に、退職した企業「単位」の女性の青春時代はまさに一九八〇年代の思想大解放の時と重なっており、当時の若い女性にとって西洋の社交ダンスは個性を表現する最先端かつ重要な手段であった。最後に、西洋の社交ダンスは「単位」の労働組合活動の重要な組織形式であり、当時の女性の社交習慣を形成する重要な空間であった。

以上三つの原因を合わせて考えると、親密かつ小さな交友関係のネットワークを持ち、ダンスという青春時代の記憶を持つ中高年の女性は、コミュニティにおける広場舞の中心的な参加者として組織者となるのである。

初期のダンスコミュニティの規模は小さかったが、活動を行ういくつかの条件は既にそろっていた。ひとつ目は、共同で安価な音響設備を購入することである。二

つ目は、メンバーが開放的な環境で踊ることに羞恥心を持たないことである。そのうち団体活動の規模も小さいものから徐々に拡大し、新メンバーも旧メンバーの交友関係や自発的な加入を通して増加していった。「単位」と「農村」という開放空間における人付き合いの習慣、そして同じ中年であるという共通点、それらが「おばちゃん」の同士のスムーズなコミュニティションに役立っている。そして、広場舞の規模が大きくなるにつれて他の住民と衝突を起すようになると、退職した「おばちゃん」は陳情、管理組合等の合法的な「コミュニティ自治」の資源を用いて直接ガバナンス機構と交渉し、自分たちの広場舞活動を保護するようになるのである。

世論において「おばちゃん」と「市民」は都市空間において対立する二者とされているが、実は両者の間に決してはっきりとした区別は存在していない。「おばちゃん」以外にも、広場で踊っている人々のなかに中年男性とますます多くの若い女性も加わるようになった。都市化が進むにつれ、世代ごとに分かれて住む状況は一般的なものとなっているが、両親と

同じ都市に住み、しばしば往来するような生活方式は八〇〜九〇年代生まれの都市の若者のなかでは依然として主流である。中国の大多数の女性は結婚後も仕事を続けるため、それによって極めて多くの世帯が両親と同居するか両親の家の近くに住むようになり、それによって家事と育児の負担を軽減させることができる。このような生活方式は母親の生活習慣が娘や息子の妻に受け継がれる可能性をもたらず。広場舞は単に「健康の為」の、敷居の極めて低い日常の運動方式であるが、仕事に追われ、健康意識の高い若い女性にもこれは徐々に広まりつつある。ますます多くの「非おばちゃん」が広場舞にコミットしていくことは、広場舞の場において形成されているものがまさに真の「市民」空間であるということの意味するのである。

（ばん にに／中国・重慶大学人文社会科学高等研究院講師）